
烈シキ風、空ニ吹き渡ル.....

霜月龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烈シキ風、空ニ吹キ渡ル……

【Nコード】

N3634J

【作者名】

霜月龍牙

【あらすじ】

一九四五年八月十五日。太平洋戦争最後のこの日、遅すぎた零戦の後継機『烈風』が空に舞い上がった。これは、嘘のような真実の話。

前編

基地に敵機襲来を示すサイレンが響き渡る。

畜生、よりにもよって人が用を足している時に来やがって！

沖縄が米軍に上陸されて以来、ここ数ヶ月間ほぼ毎日のように空襲だから嫌になっちまう。

つたく、アメ公もこんなド田舎（三沢基地）までご苦労なことだぜ。

「回せ回せえー！！」

「コンタアークー！！」

「クソッ、こいつはもう駄目だ！早く掩体壕へ入れるッ！！」

このような喧騒が当たり一面に響き渡る中、俺……すわう周防 まのじ正則少尉は列線から少し離れたところにある愛機に向かって猛ダッシュをしていた。

サイレンが鳴り始めた時に丁度用を足していたのが災いして、既に五二乙型や五二丙型といった新品の機体は取られている。

まっ、あんな不良品に乗るなんてこっちからお断りだけだな！

幸か不幸か、残っているのはいつも俺の独占状態にある三二型だけだ。

だが、俺はその愛機に向かうもう一人の人影を見つけた。

どうやらそいつは、先月配属されてきたばかりの新米搭乗員のようなだ。

そいつは俺よりも早く愛機にたどり着き、それに乗り込もうとする。

「おい、どきやがれ新米がッ！！」

俺はそいつをあらん限りの声量で脅す。

そいつは一瞬動きを止めて、俺のほうを振り返る。

この僅かな間に、俺はそいつを押しつけて愛機に飛び乗った。

そいつが文句を言っているのが風防越しに見えるが、あいにく俺はそいつより階級も上だし、潜っている修羅場の数も遙かに違う。

そんなヒヨッコに俺の愛機を譲る機は更々ない。

安全帯を締めた俺は、既に機体に取り付いていた整備兵に合図を送る。

彼らといつものやり取りした後でエンジンを始動し、機体を移動させる。

機付長にいつも酒やタバコを差し入れているお陰か、今日も愛機の調子は完璧だ。

最近の女学生まで工員に動員しているためか、機材の質が下がる一方で、他の機体なんてとてもじゃないが乗れたものじゃない。

そんな劣悪な状態でも、どうにかしてマトモに飛ぶようにしてくれる整備兵たちには、ただただ頭が下がる。

まあそれとはかく、これでクソ忌々しいアメ公をブチ殺す準備が完了だ。

さて、今日は何機落とせるのか……………

「おい、知っているか？」

そつ通信科のコレス（同期）に話し掛けられたのは、今日の出撃で見事敵機を撃墜して非常に機嫌の良いときだった。

「なんだ？また『どかれん』（この当時の予科練上がりの新米の蔑称。飛行機不足のために土木作業しかすることがなかった）が配属

されるのか？」

俺は軽い皮肉を混ぜた特製ジョークを飛ばす。

だが、普段ならノってくるはずのそいつは、やけに真面目そうな顔をして何も話さない。

流石に様子がおかしいので、俺はそいつを人気のない所に誘う。

「なあ……聞いて驚くなよ」

普段の奴らしくなく、やけに勿体ぶった言い回しで聞いてくる。奴の態度に不審感を覚えた俺は、黙ったまま首肯して先を促す。

「明日……日本は降伏するらしい」

俺は最初彼の言っていることが理解できなかった。

降伏？……この帝國が？

「……馬鹿な」

俺は思わずその言葉を口に出していた。

いくら九割五分の精度を誇る奴からの情報とはいえ、それだけは容易に納得できない。

そんなこと有り得るはずが……

「……もう一度言う。これは本当だ。

明日の正午、陛下の玉音放送が流れることになっている。

既に大本営には終戦の詔勅が下ったらしい。ほかにも……」

そいつは淡々と知っている事実を述べ始めた。

そいつによると、ミッドウェー以降から帝國は負けに向かって転が

り落ちていったらしい。

確かに、ミッドウェーは俺も参加してひどい目にあっただし、ソロモンの戦は敵も味方もバタバタ落ちていた地獄だった。

マリアナは………思い出したくもない。

さらに彼の話によると、去年の暮れごろから戦況は特に逼迫しており、開戦の時の余裕はどこにも見当たらないらしい。

帝國がいずれ負けるであろうということは、最前線にいる俺は薄々気づいていた。

だが、心のどこかでそれを認めたくない部分があり、奴の言葉を否定したのであるう。

「……なるほど、それは分かった。

それなら、どうしてその事を俺に言っただんだ？」

俺はどうにかして気持ちを落ち着かせてそう言った。

額には脂汗が滲んでいる。

「まあ……お前とは海兵団以来の仲だしな。

そんだけ重要な話な訳だから、是非お前に知ってほしくてな。

それに、ここからは個人的なお願いで悪いんだが、お前にはあれを飛ばしてもらいたい訳よ」

そいつが指差したのは、基地で一番端の格納庫だ。

そこに格納されているのは、新型の試作艦戦である『烈風』のみであつた。

俺はまた予想の斜め上の答えを返した奴に、もはや何も言えなくなつた。

確かに、俺は『烈風』に何回か試乗したことがある。

艦攻並に大きい機体ながら、素直な操縦性、ヘルキャットを上回る高速・運動性、防弾も一流という高性能振りに惚れ惚れしたものだ。

だが、いくら終戦直前とはいえ、軍の大事な試作機を勝手に使っている筈がない。

ましてや、墮とされでもしたら……

「責任問題については大丈夫だ。小福田少佐や基地司令には許可は貰っている。

どうせ終戦のドサクサに紛れて処分するらしいから、お前になら是非とも飛ばして貰いたいとのことだ。

それに、零戦じゃあもう物足りないだろ？」

どうやら上も説得済みらしいという奴の手回しのよさに、俺は啞然とした。

だが、上公認で烈風に乗れるのなら願ってもない事だ。

零戦も確かにいい飛行機に違いないが、愛機の三二型は旧式機のためにガタがきており、敵と比べて速度が圧倒的に不足している。

他の機体は……旧式の愛機にすら速度が劣っているのがあった、とだけ言っておこう。

その点、烈風はヘルキャットよりも速く、マスタングやサンダーボルトよりも小回りが利くため、戦闘を有利に進められる筈だ。

「なるほど……そいつはすげえや」

俺は身体の内側から湧き上がってくる興奮を必死に抑える。

そうでもしないと、そこら辺を飛び跳ねてしまっくらい嬉しいからだ。

「それで、俺はどれに乗るんだ？」

現在、基地には三機の烈風がある。

そのうち、試作五号機と試作六号機は量産機に搭載されている最新

鋭の大馬力エンジンである、八四三を搭載している。

しかし、試作三号機は八四三との比較試験の為に誉エンジンを搭載したままであり、性能的には八四三を搭載した二機に劣っている。

「お前は試作五号機で、六号機には難波中尉なればが乗る事になっているらしい。

で、三号機は予備だ」

奴はニヤリとしながらそう言った。

難波中尉といえば日支事变以来の大ベテランで、俺の飛練時代の教官でもある。

中尉の撃墜数は百を超えており、旧式の九六戦を操りながら単機でヘルキャット一個小隊に勝ったことがあるほどの腕利きだ。

「そうか、難波さんか……それなら一個中隊、いや二個中隊相手でも余裕だな」

これからどのような戦いになるのか想像して、俺は思わずほくそえむ。

俺と中尉となら大戦果を挙げることが間違いないだろう。

「だろ？……それじゃあ、明日は頼んだぜ」

奴はそう言って仕事場へ戻っていく。

これから通信機との睨めっこを再開するためだ。

「おう、任せとけ！」

俺はそう答えると、そのまま宿舍へと足を運ぶ。

ああ、明日は烈風に乗ってアメ公を墮としまくるのか。

.....待ちきれないぜ。

前編（後書き）

ども、霜月龍牙です。

なんか気が向いたので、短編なぞを書いてみました。

幻想本編の更新を期待していた方、申し訳ございません。

言い訳は後編で述べるので、とりあえず世界観について少し。

現実世界の烈風は試作機が8機、量産機が少数機作られたそうです。烈風は元々誉エンジンを搭載する予定が、当時の品質の低下による性能不足で満足な性能を発揮できませんでした。

そこで、三菱が新型エンジンの八四三を搭載したところ、良好な性能を発揮したので軍は烈風一型として採用しました。

しかし、エンジンの製造工場が震災と空襲により壊滅し、供給がストップしてしまいました。

そして、試作機は殆どが八四三に未改修のまま空襲や事故で失われ、量産一号機は完成直前で終戦を迎えました。

一方この小説の世界では、試作機3機が青森の三沢基地に疎開し、2機が八四三に改修済み、1機が誉搭載のままという設定になっております。

ちなみに、物語中には出てきませんが、量産機はまだ未完成です。主人公の周防少尉や彼の師匠である難波中尉はもちろん架空の人物で、二人は日華事変以来の大ベテランでスーパーエースという、ご都合主義全開の設定です。

あと、物語中の零戦についての描写は幾分か誇張はあるものの、事実だったそうです。

それでは、どうぞ後編もお楽しみください。

後編

八月十五日。

いよいよ、今日が最後の戦だ。

そして烈風の初陣でもある。

俺達は零戦の初出撃のような伝説的な戦果を携えて戻って来なければいけない。

だが、そのプレッシャーが逆に心地好い。

俺は朝飯を食って軽く体操した後、格納庫へ向かった。

格納庫では整備兵達が泥のように眠っている。

きつと徹夜で整備してくれたのだろう。

既に滑走路に並んでいる三機の烈風は、ジュラルミンむき出しの肌を朝日に輝かせている。

帰ったら彼らに差し入れを持っていかなきゃな。

「よオ、周防。調子はどうだ？」

俺が滑走路に向かおうとすると、難波中尉が俺の肩を叩いて話しかけてきた。

いつもは冷静沈着な中尉にしては珍しく、興奮したような声だ。

「完璧ですよ、これまでにないくらい」

俺はそれにニヤリと笑い返す。

ここ数年あるかないかというほど、俺の調子は良い。

これなら悔いなく暴れまわれそうだ。

「そうか……いよいよこれが最後だな」

中尉は眼を閉じて、感慨深そうにそう言った。

俺もそれに倣って眼を閉じる。

すると、これまで散った上官や戦友、部下の顔が走馬灯のように思い浮かぶ。

「ええ、今まで散った奴らのためにも……！？」

とその時、警戒警報が鳴った。

俺たちには即時邀撃の命令が出ているため、すぐさま機体に向かわなければならない。

「行くぞッ！」

中尉はそう言い終わらない内に、烈風に向かって走り出す。

俺も負けじと中尉の後に続いた。

烈風を見ると、ちょうど暖機運転のためにエンジンを回し始めたところだ。

「飛曹長、頑張ってください！」

「大戦果を期待してます！」

エンジンを回していた整備兵たちが、口々にエールを送ってくれる。その一言一言が何よりも嬉しい。

「任せとけ！」

俺はそう応えて機体に入り込む。

俺は席に座るなり、計器のチェックをする。

油温、筒温、燃料、計器、全て問題なし。

一番心配していたエンジンも、今日は好調なようだ。

「飛曹長！」

その声のする方向を見ると、機付長がいつの間にか機体によじ登ってきていた。

俺は閉めていた風防を開ける。

「いいか、必ず帰って来い！！」

機付長はそう言って俺の肩をバシバシと叩いた。

俺はそれにサムアップで答えて、風防を閉める。

機付長はニヤツと笑うと、急いで機体から離れた。

今まで世話になってきた機付長に軽く敬礼をして、エンジンを吹かして機体を滑走させる。

試作機としては珍しく、機体各部の具合は完璧だ。

『こちら難波一番、感度良好。機体の調子は問題ない』

機体を移動させていると、中尉から無線が入って来た。

どうやら中尉の機も調子が良いようだ。

帰ったら機付長や整備兵達に感謝しなければいけないな。

「こちら難波二番、感度良好。幸いなことにこっちも大丈夫です」

俺はそう言つと、無線電話のスイッチを「送」から「受」に切り替える。

今年になってようやく……本当にようやくマトモな無線電話が実用化されたのはいいが、こういうところが面倒極まりない。

『こちら管制塔。敵は基地より南南東五十キロの海上、高度は五千くらいだ。

最後の戦、頑張ってくれよ!』

普段は落ち着いて管制を行う上等兵曹も、興奮して声が上擦っている。

この出撃がこの基地において最後になり、この烈風の初お目見えでもある。

基地の皆はその事に興奮しているのだ。

『こちら難波一番。任せてくれ、祝賀会の用意は頼んだぞ!』

そうこうするうちに、二機は滑走路の端にたどり着いた。

指揮所の辺りには見送りの兵たちが、盛んに手を振っている。

俺はそこに向かって軽く敬礼すると、発着士官が持つ旗に注目する。いま、旗が振られた。

その瞬間、俺は車輪のブレーキを解除するとともに、スロットルを赤ブースト直前まで引く。

身体が座席に押し付けられるような感覚を味わいながら、機体は加速していく。

栄とは違う八四三の力強い爆音が辺りに響き渡る。

しばらく滑走させると、機体はふわりと宙に浮いた。

それから気速が乗ってくるのを計器で確認すると、手元のスイッチを押して主脚をしまう。

「……これで、最後か」

これまで何千、何万回と繰り返したこの動作もこれが最後だ。そう思うと、感慨深い何かを感じる。

俺はもう一度基地のほうを振り返り、万感の想いを込めて敬礼をした。

離陸してから十数分くらい経ったであろうか。

烈風はあつという間に高度五千まで駆け上がり、既に機銃の試射も済ませている。

時間からいつて、もうそろそろ会敵しそうな頃合である。

『こちら難波一番。敵機発見。一時の方向、距離二万、敵高度五百低い』

中尉から無線電話が入る。

さすがは『魔眼の持ち主』といわれるだけある。

敵機の発見がやたらと早い。

俺が指示された方向を見ると、辛うじて芥子粒大の点が見えるくらいだ。

『敵はヘルキャットの二個中隊だ。いけるな?』

中尉が念押しのように聞いてくる。

言われるまでもない。

やってやるさ。

『もちろんです、中尉!』

互いの距離が五千を切ると、いよいよ敵機が大きくなってきた。

こちらは太陽を背にしているので、敵機に気づかれる心配はない。中尉がバンクを振った。

突入用意の合図だ。

二機は半横転ハーフロールをして背面飛行に移る。

『よし、三……二……一……行くぞッ！』

中尉の合図で俺達は、敵機に向かって背面のまま急降下する。

零戦と違って降下のGが凄い。

速度計を見ると、四二〇ノットを超えていた。

華奢な零戦では到底無理な芸当だ、

哀れな敵機共は、まだ俺たちには気付かない。

「さあて、これから大暴れしてやるぜ！」

烈風のエンジンがそれに応えるかのように、一段と高く鳴り響いた。

それから数時間後。

通信科のある古参下士官の言うとおり、帝國はラジオを通してポツダム宣言を受諾して無条件降伏したことを国民に説明した。

帝國は占領軍の統治下に置かれ、復員作業が終了するとともに、この戦争を招いた張本人である軍は解体された。

数年後、帝國はサンフランシスコ平和条約によって日本国と改称し、独立を回復。

同時期にかつての軍は、警察予備隊となって再編されることになる。時が経つにつれて軍は名実ともに変わっていき、現在は防衛省の指揮の下で自衛隊と名を変えてその役割を担っている。

一方、烈風には進駐軍の引渡し命令が出たものの、全てが飛行不可能であるのですねに撤回された……とされている。

現在、防衛省の戦史部にある公式記録には、烈風の試作機についてこう書かれている。

『試作五号機：八月十五日、米艦載機二ヨル三沢基地空襲ニテ被爆。現地ニ於イテ廃棄処分』

『試作六号機：同上』

後編（後書き）

ども、霜月龍牙です。

悲運の傑作機である烈風にスポットを当てた今回のお話、楽しんでいただけたでしょうか？

今回、烈風対グラマンの空戦の結果は、本編には書きませんでした。16対2という無謀に近い戦いでグラマン相手に圧勝するもよし。はたまた、序盤の優勢にも関わらず、数で押し込まれて二人とも戦死してしまうのもよし。

全ては読者様のご想像にお任せします。

さて、幻想の本編更新していないのに、なぜ短編なぞを書いているのかといえば……ただ書きたかったからです。（ホント、いい加減な理由ですみません……）

この短編は幻想本編に比べて、企画構想5分↓執筆・校正2日という信じられないくらいのスピードで書き上げてしまいました。

おそらく、なんらかの電波が流れ込んだせいだと思います。

という訳で、近日中には幻想の本編を更新できればいいなあと。

もしこの短編のご意見・ご感想があれば、ぜひとも送ってください。もしかすると作者の執筆速度が上がるかもしれないです。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3634j/>

烈シキ風、空ニ吹き渡ル.....

2010年10月15日21時53分発行